詩余ものがたり　南宋篇（三）

――清・葉申鄉『本事詞』――

松尾肇子

三十六、呉文英が女冠に贈った詞

短篇の〔女冠子〕では、唐の人は題のとおり道教の尼、女冠を詠じることが多くありました。南宋になってからは、女冠は自分たちで風流だと自認していましたし、彼女らに詞を作って贈る人も少なくはありませんでした。たとえば呉文英の詞集『丁稿』には、〔酔落魄〕の曲でハスの花咲く藕花洲の女道士の扇に書き付けた詞があります。

春があたためた紅い玉のようなこの花は、
濃緑の美しい布を裁つのを稽古して柔らかな衣装を身にまとう。
夜半　香は燃えて短くなり　銀の屏風にうつる灯。
こっそりと金の銭を投げて、
もう一度　その心を占う。

翠は深く　おしどりが宿るのを妨げず、
あの頃の菱採り歌を誰が覚えているだろう。
青い山の南のあたり　紅い雲の北。
波の中心に浮かぶ一枚の葉のような心、
きらめく薄色の衣。

〔蝶恋花〕の曲では華山の女道士の扇に書き付けていいました。

北斗が秋の夜空に横たわり　雲なすまげが影を落とす。
鶯の羽のように衣は軽く、
腰は痩せて青い糸のベルトを余らせる。
遊仙詞の一曲を奏でる玉磬の音が聞こえ、
月が照らす奥深い建物ではようやく人が寝静まった。

十二回も折れ曲がる闌干に　笑ってよりかかり、
風と露とが寒さを生んで、
その人は蓮華峰の頂きにいる。
眠りが重く押し寄せて残った酒が醒めるのも分からず、
何度も鴉が鳴いて碧の布を張った窓は暗くなる。

〔朝中措〕では蘭室の女道士の扇に題していいました。

楚の水辺で出会うとあでやかに笑った、
川は碧く　遠い山は青い。
露が繁く　ひそかな香には恨みが込められ、
月は明るく　秋の帯玉は音もたてない。

銀の燭台に灯が燃え、
金の香炉には燃え残りが暖かく、
真色の薄絹を張った屏風。
病気から起き上がるとすっかり痩せ、
夢から覚めかけるころ　春の思いを少し抱く。

これらはどれも艶詞です。

三十七、呉文英の髑髏の詞

ある人が顔半分の女の髑髏を描き、呉文英はたわむれに次の詞を書き付けました。

目覚めると　かんざしで雲のように豊かな髪をくしけずり、
垣根の向こうの杏の花枝を折り取る。
春の盛りに顔の半分だけに絵のように化粧を施し、
小雨のそぼふる真夜中に　花はまたも飛ぶ。

愛しつつも軽々しく別れたのは、
古い馴染み、
草の生える墓を照らす夕陽　腸が断ちきられるほど悲しい。
乱れ飛ぶ紅い花はひたすら風に任せて吹き散らされるが、
煩悩が無くなった時には衣服につくこともない。

三十八、呉文英が老いた芸妓のために作った詞

孫惟信（号は花翁）が呉門にいたとき、昔なじみの芸妓に会ったので、呉文英を招いて彼女のために〔倦尋芳〕を作ってもらいました。次のような詞です。

井戸に落としたつるべのように　去った人の便りは絶え、
迷宮の楼の鏡には塵が積もり、
ひっそりと一羽の燕。
情愛深い崔徽のようなその人との別れに送った、
清らかに痩せた美しい面差しの絵姿。
船を動かして柳につなげば　期せずして、
縁あった人が桃の花と照らし合って現れた。
別れてからのことを物語る、
傷跡は香のやけど、
みどりのまげを軽々しく切ってしまったのは残念だ。

ひそひそと語るような、怨みに満ちた琵琶の音を聞き、
旅人の鬢の毛は白くなり、
袖は涙に濡れる。
だんだんと老いていく蓮の花、
霜を帯びてもなおも重ねて見る。
ひとすじの情は深く　朱色の戸は閉ざされ、
遠くの青い山のようなふたつの眉に愁いが起こる。
西風に、
またも吹きとばされて、
夢の魂はちりぢりになった。

三十九、呉文英が丁宥の側室に贈った詞

丁宥（字は基仲）の側室は、吟詠ができ、琴の演奏も上手でしたので、

呉文英は彼女のために〔高山流水〕を作って贈りました。

絹の絃の一本一本に秋風が起ち、
柔らかな思いをすべて春の葱のように白いその指が写していく。
琴柱の向こうに　腸を断つような声をたてて、
霜気の満ちる遠い空から驚いた白鳥がひそかに下り、
眉をひそめる顔は、緑の葉　紅い花を切ったよう。
仙界に迷い込んだ男がともにいて、
新曲のあとには旧曲をつづけ、
窓を月が照らす。
名花がつぼみを並べたようで、
毎日　濃い春の気配に酔う。

呉には、
美女の西施がいたと伝えるが、
羽から宮に転調することは分からなかったにちがいない。
蘭のかおりが胸に満ち、
緑の葉に唾するのも花茸を噴くようで、
奥深い座敷で、春の巧みを尽くそうと考えている。
旅人は深く愁い、
ときおり芭蕉の葉に雨が砕ける音を聞いて、
涙が玉の杯にこぼれる。
こんなに風流と称えられる、
美しい人を金の部屋に閉じ込めて物思いさせておくなんて。

四十、史達祖が星娘に与えた詞

星娘という楽妓がおりまして、俗世を厭い、女道士になりました。彼女の昔の恋人は未練があって忘れられず、史達祖に頼んで〔漢宮春〕を作ってもらうと彼女に送りました。次のようなのです。

花は東の垣根の向こうがわ、
燕国の招賢台の人のように優れた句を詠じ、
帯を結んで逢おうとしたものだ。
あわただしくも昔の約束は期限がきて、
いくつも重なる扉のむこうへ夢は飛んで行った。
南の塘　真夜中の月が、
照らすのは　湘江の女神の琴、群れをはぐれた鶴　連れを失った鸞。
天はそこで、
清らかな愁いをいつまでも解かせないのか、
春の衣はいつも冷たい香りに包まれている。
唐昌公主が暮らした宮観はどこだろう、
ふと夕焼けと霧とを裁縫して身にまとい、
世俗の縁を払い落とした。
読経の一声は美しく、
雲は天壇にとどまって行こうとしない。
さびしくひっそりとしたふるさとでは、
世俗を訪れることのない彼女の車を思うのだ。
再び会うのを恥じらって、
東陽の長官沈約殿のベルトが緩むほど、
昔のままに俗世の男に思わせる。

四十一、趙師侠

趙師侠（号は坦庵）は、南宋宗室の俊才でした。詞にたくみで、妓

女に贈った作品もたくさんあります。妙恵に贈った〔鷓鴣天〕には次のようにいいました。

妙なる曲　清らかな声　楚の町を圧倒し、
蕙のようなうるわしい心　蘭のようなかぐわしい姿　やさしい情けを見せる。
波の上を穏やかに　金の蓮を踏んで小さな足が歩み、
爪を浸して玉のタケノコのような指が酒を注ぐ。

ゆるゆると歌い、
ころころと笑い、
人に向かってまことに愛らしい。
仙人の住まいは意外にも春を隠していた、
どうして風に乗って世俗の塵を追いかけることがあるだろう。

また滕王閣では段雲軽に〔浣渓沙〕を贈っていいました。

落日はひっそりと翠のかげを下ろし、
断ち切れた雲は軽やかに夕風を追いかけて帰って行く。
西の山　南の浦が　絵屏風のようにあたりを囲む。

ちらりと送る流し目は川の流れのように明るく、
両の眉は翠の山のようにいつもおだやか。
その人の姿と風景と　どちらも好ましい。

また曾無玷とともに尤賽娘が将棋を打つのを見て〔点絳唇〕にいいました。

柔らかくなよやかに人の心を満足させる、
尤賽娘のみやびな趣。
美しい花か　しっとりとした玉か、
ちょっとつまめば　春も近い。

進路をうかがい　機を見て、
もう盤の真ん中へと進んでいる。
きいてはいけない、
酒屋の旗　花の陣、
いつ勝ちを争うのだろう。

三首はどれもひそかに名前を隠しているということです。

四十二、趙長卿の妾

趙長卿は南豊の皇帝の一族で、仙源居士と号していました。かつて一人の妾を置きましたが、たいそう賢いので、蘇軾の文字を学ばせ、蘇軾の詞を歌わせ、文卿と名づけました。もともと三年の約束の満期になり、文卿は立ち去りたくなかったのですが、彼女の母親は認めず、無理に連れ帰ると、一人の農夫の家に嫁がせました。文卿は愛情を忘れることができず、あるとき詞を寄こしましたので、趙長卿は和韻して答えました。次の〔臨江仙〕がそうです。

愛らしいえくぼでにっこりと笑い、
なみなみと杯を挙げて迎えてくれた。
賢い心根は才女謝道蘊のようだった。
燭台に灯火がはじけ香炉からは霧のような煙、
可愛く困ったような顔はほんのりと紅かった。

別れの恨みを美しい便箋に綴って寄こしたが、
一緒に歌い酒を酌むのは難しい。
楚（ソ）の国の館では夢から覚めれば雨雲がたれこめるばかり。
春の夕暮れの中　思いを寄せれば、
愁いは緑の野原に満ちる。

のちにまた〔鷓鴣天〕を送りました。

清らかな〔金縷衣〕の歌声、
めぐらす思いを誰が知るだろうか。
別れてからは会うことは難しく、
ただ紅を題にして好い詞を送ってくれる。

思い出す　手をとりあって、
階段を上ったのは、
おぼろ月に花影もぼんやりしていた時。
玉のかんざしが頭にかすかに震え、
ずくの枝にひっかかった簪が揺れて落ちたのを。

四十三、趙長卿が夢雲（ぼううん）に与えた詞

趙長卿には笙の笛が上手な夢雲という楽妓がいましたが、とつぜん髪を切って道を修めたいと申し出ました。そこで〔臨江仙〕を作っていいました。

柔らかな蕊の花房は素晴らしく好ましく、
東風も同じように春の巧み。
百年楽しく笑い　酒の樽を一緒に楽しもう。
笙の音は鳳凰の雛が語るよう、
紅いスカートは石榴を染め出したよう。

五色の雲の奥深くにとどまり、
錦のふとんに刺繍した幌でゆったりと歩こうというのか。
鳥かごを出てどうするのだ。
蓬萊（ホウライ）の仙界の人は来ることもまれで、
雲雨を降らすことも難しかろう。

四十四、趙長卿が盻盻（へんへん）に贈った詞

趙長卿はあるとき川辺の高楼の宴席で、盻盻という歌姫が、琵琶を弾き、梁州の曲を舞うのを見て、〔水龍吟〕を贈って次のようにいいました。

酒が頬を紅くし　二つの目がうるおい、
横たわる遠い山のような眉と照らし合う。
あかぬけてすぐれて雅で、
あだっぽい姿は、
滅多に見られない。
蓮の花を踏むようになよなよと歩み、
帰りを促すカスタネットの音のなか、
波を踏んで行き　一緒にはなり難い。
この仙源のよっぱらった目に、
細い玉のような指が巧みに、
新しい曲をかき鳴らし、
波紋が広がる。

私は感じやすく病がち、
人前に出ても、ただ酒をお断りして妨げになるばかり。
正直に言えば、
詩を作る気持ちも萎えて、
沈約のように痩せている。
だが春の神に大いに感謝しよう、
親切にも私のことを知って、
紅い袖を翻して演奏してくれた。
明朝になればまた、
頭を抱えて起き上がれないだろうか、
この川辺の楼閣で。

四十五、侯寘

蔡仲常は、幼嬌という名の、素晴らしく風情のある、小さな歌姫を得ました。侯寘（号は懶窟）が彼女のために〔西江月〕を作って次のようにいいました。

くずの梢の先ほどのお年頃、
水の上の蓮のような心持ち。
幼い雲のような髪　美しい玉のような顔に　二つの眉が春のよう。
都のあの頃のおもむき。

金糸の衣で深々と客に酒を勧め、
美しい梁の埃を舞い散らすほどの高い声。
主人は西王母に仕える董双成を連れてきた、
仙界の瑶池での宴会を忘れるに違いない。

四十六、呉文英が舞姫を詠じた詞

臨安の都の市場には舞妓がおりまして、呉文英は〔玉楼春〕を作って次のように詠じました。

柔らかな山猫の毛皮の帽子で額の梅花粧を隠し、
身にぴったりとまとう上着は金糸の飾りの透き通った薄絹。
争い見れば、肩に乗せた小さな身体は、
けだるげで　無理に笛や太鼓ののどかな音に合わせている。

聞けば家は町の東の通りにあるという、
千金で買っても惜しくない。
帰って来れば疲れて春の眠りの中、
夢の中でも拍板に合わせて袖を翻しているようだ。

四十七、楊皇后の妹

楊妹子は、宋の寧宗の楊皇后の妹です。彼女の書く文字は寧宗にとてもよく似ていて、宮廷が所蔵する名家の絵に、たくさん題詠させました。馬遠の「松院鳴琴」の小さな軸には次のように題しました。

静けさの中　七絃琴を奏でてみても、
この曲を分かってくれる者は滅多にいない。
なんともあっさりとして味がないからで、
鄭の淫らな音楽など比べようがない。

松の庭は静かで

たかどのは竹の奥深く、
夜はしんしんとふけていく。
清らかな風が枕元を吹きすぎ、
明るい月が軒端にかかり、
誰が奥深いこの思いを分かろうか。

その詞もまたあでやかで優れており好ましいものです。

四十八、詹玉

都尉の楊震には十人の家姫がいて、みな美しいのですが、なかでも粉児が優れていました。ある日、詹玉（字は天游）を宴会に招待し、十人全員を席に出して酌をさせましたが、詹玉は粉児にだけ思いを寄せました。酒もたけなわになると、〔浣溪沙〕を口ずさんで彼女に贈りました。

うっすらとした青い山は　ふたつ春を点じたようで、
愛らしく恥ずかしそうな口は一粒のサクランボ。
わだかまる雲のような髪に一本の玉のかんざし。

白い蓮のかおりの中に西施を見つけたか、
玉の梅の花の下で王昭君に出会ったか。
これまでこんなに魂がとろけたことがない。

楊都尉はすぐさま粉児を彼に贈り、合わせて「詹玉殿を本当にとろけさせてしまえ」と言いました。まことに風流この上ない豪快なお人です。

四十九、陳詵

湖南の人陳詵は、科挙に合格すると、岳州の教授を授かり、営妓の江柳とねんごろになりました。当時の岳州知事孟之経にその事を知られました。たまたま彼が宴会を開いたところ、江柳は席に侍らず、何度も呼んでようやく来たのですが、孟知事は怒って杖で打ち、さらに眉間に「陳詵」の二字を入れ墨し、辰州に送らせました。陳詵は恨みに思ってもどうすることもできないのでしたが、江柳の母親は恨み言を言って責めたててやめません。陳詵はそこで持ち物を売って、わずかに手にした千緡の銭を与えると、ようやくやめました。陳詵はひそかに江柳に詞を贈って言いました。

鬢のあたりには鴉が飛ぶよう、
翠の螺鈿で隠すのはやめよ。
二年三年、
ねんごろに愛してきたが、
今日は空の果てに別れていく。

柳のわたは又も東風に追われて去り、
思うままに人の家に入っていく。
もしも思い出したくないのであれば、
酒が醒めても、
菱花の鏡に映してはいけない。

江柳が旅立とうとしたとき、陳詵の友人の陸叡（号は雲西）が、荊湖制司幹官として檄文を奉じて岳州に来ました。陳詵はひそかに訪ねると、事情をつぶさに伝えました。陸叡はすぐさま名前が空欄の文書に、陳詵の姓名を書き入れ、檄文は軍営に入りました。岳州に到着すると、

孟知事が郊外まで出迎えました。軍営に入ると、陸叡のために宴会を開きました。席上、陸叡は「江柳が歌が上手いと聞いているが、今いるだろうか。」と言いました。孟知事はすぐに呼んでこさせ、江柳は翠の螺鈿を眉間に貼って宴席に侍りました。歌が終わり酒もたけなわになったころ、陸叡はふざけて孟知事に「江柳を私に会わせることはできるかね。」と言いますと、孟知事は仰せの通りにと答えました。陸叡が笑って「君は陳教授を許すことができないのに、どうして私のような者にはできるのだろうか」と言いますと、孟知事は陳詵の過失を述べました。宴席が終わると、陸叡は江柳を呼び、そのことを問いただしました。出発に際して陳詵に贈られた詞を江柳が取り出すと、陸叡は大いに褒め、そこで再び席について、陳詵の詞を孟知事に示し、「君はこの詞を見てみなさい、人を知らないというものだ。いま制司の檄文で陳詵を幕官にするが、どうしたものか。」と責めました。孟知事は陸叡に許しを乞い、すぐさま陳詵を召し出して宴席をともにしました。翌日、陳詵を登用して剡州に推薦し、江柳の楽籍を抜いて贈りました。このことは楊万里（号は誠斎）が岳州知事の時のことだと誤って伝えられていますが、そうではありません。楊万里がそんな興ざめな人物であることなど、どうしてありましょうか。

五十、呂渭老

呂渭老（字は聖求）に、歌手の李蓮に贈った〔卜算子〕がありまして、次のようなのです。

渡し場にみるみる潮は増して、
ヨシやアシが茂る浦に水が満ちる。
いつまでも忘れない　小さな小船に月光を乗せ、
蓮の茂みに深く入って行ったのを。

詩余ものがたり　南宋篇（三）

蓮の葉は水の広がる池を覆い、
帰り道を忘れてしまった。
誰が覚えているだろう　百尺もある高い南の楼、
蓮のような足が歩くのを見なかったと。

五十一、徐似道

起居舎人の徐似道は、詩文で冗談を言うのが大好きでした。丁少瞻は妻と言葉が行き違い、家を捨てて茶寮山に住み、菜食し誦経して、毎日水産品を買っては放生してやり、長らく帰りませんでした。彼の妻はこれを気に病み、言い聞かせてくれるようにと徐似道に頼みました。徐似道は承知しました。たまたま老婆牙を売っている人に遇ったので、大きな籠にいっぱい買い、合わせて次の詞を作ってすすめました。

茶寮山のお坊様、
新たにやってきて何を学ばれる。
ドジョウ、カニ、それに巻き貝、
どれほど生き物を放したか　ご存知か。

蜂の巣に似た物があり、
姓は牙　名は老婆。
それを得たとてどうしようもないが、
どうすれば彼女を放すことができるだろう。

丁少瞻は詞を見ると、大笑いして家に帰りました。

五十二、鍾輻

江南の士の鍾輻は、青箱という名の妓女をたいそう寵愛していました。のちに他所へ行くと、〔卜算子慢〕を送っていいました。

桃の花咲く奥庭に、
もやは重く立ちこめ　露は冷たく、
ひっそりとした寒食の晴れた昼。
風は朱いカーテンを揺らし、
また去年の今頃を思い出している。
心に春を惜しんで、ひっそりとした華麗な窓辺を喜ばず、
屏風に近く、衣を着たまま眠り、
酔った残りの酒にひそかに耐える。

一人、しばらく高殿の手すりに寄りかかり、
玉の筍のような指でひそかにはじき、
軽く闘わせるかのように蛾眉を寄せる。
一つの相思、
何もかも自分が甘んじて受けよう。
金のかんざしを抜いて、画家をやとい、
別れてからの、面差しを描いて送ろう、
すっかり痩せてしまったことを知らせるために。

五十三、呉潜

徐清痩がまだ無名の頃、建州の官妓唐玉に贈った詩に次のように言いました。

都に遠いこの国に新しく流行している巧妙に作った花、
鬢には柳を一枝　斜めに挿す。
愛らしく恥じらって　まだ恋しい男の思いに応じず、
美しい顔をわざとそむける。

呉潜（号は履斎）がこれを見て、また彼女のために〔賀新郎〕を作っていいました。

可愛い人は玉のよう。
小さな窓辺で、軽く白粉を整え、
道家の装束をまとう。
春が帰って行ってしまうと尋ねるところもないことをいつも恨みに思っていたが、
明るく光る波、緑の眉のような山にいて、
艶冶な葉、高い枝のまったく俗なのを見ている。
清らかで風韻がある江梅のようで、
さらに風に吹かれ、月に対して竹にしなだれかかるのになぞらえようか、
見ても見足らず、
詠じても詠じ足りない。

折れ曲がった屏風は半ば閉じて春の山がならぶよう。
おりしも肌寒く、夜は深くて花は眠り、
燃え残った灯になかばよりかかる。
あたりに漂うあかねかがやく夢の中、
衣装には残り香がかおり、
ただ銅の水時計の音が急かすのが心配だ。
試しにきいてみる　人が帰って行くのを送ったあと、

花影が金の花蕊を垂らす化粧箱に向かうのかと。
腸は断たれやすく、
恨みは続き難い。

五十四、潘牓（はんぼう）

延平（エンペイ）の楽妓に、竹の水墨画と草書が上手な者がおりました。潘牓（字は庭堅（ていけん））がかつて彼女に思いを寄せ、詞を作ってやりましたが、その終わりに次のようにいいました。

玉のベルトに魚の帯玉を垂らし、
黄金の印を作って、
王侯に封じられて万戸を治める。
君王にすっかり税をお納めしたら、
愛卿（あいけい）を手に入れて帰って行こう。

彼がどれほど彼女に心酔していたか、わかるでしょう。潘牓はのちにまた延平の港を通ると、彼女を再訪しましたが、その人はかなり前にすでに羽振りのよい者に連れ去られていました。そこでまた壁に書き付けていいました。

欄干によりかかるのをおそれる、
楼閣の下には谷川の音　楼閣の向こうには山。
空しくも昔の山と川は、
そのままだが、
暮れには雨となり朝には雲となって訪れた人は行ってしまって戻らない。

飛び去った鸞鳥を追いかけよう、
月の下でもいつもあの人の帯玉の音が分かった。
月も次第に低くなり　霜も降り、
夜も更けて、
梅の花を折り取って　一人みつめる。

潘牓は、三山（サンザン）の人です。